

思生坤
一
々

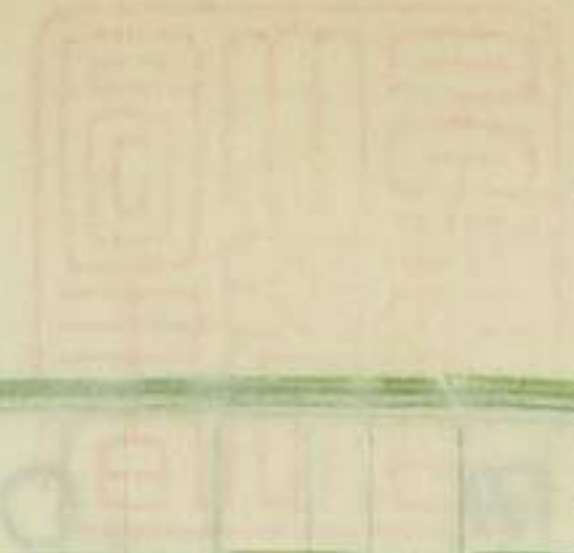
リ 5
2844



リ5

門リ伊5
冊 2874
巻

修政ノ新編



思出州

完

國書刊行會



思出草

○此一冊の筆の跡はかの昔々物語春臺先生の獨語て
 ふ書のたぐひにしてそのかみ質素の江戸のありき
 まを今まのあたり見るかごとく又考証の一助とな
 れることこれかれあり實に今に至りては一珍書と
 いふべきふみにちむ

○此記者其姓名を今何人と知るよしなしといへとも
 一卷中の文段によりて考るにその人からのおほか
 たはしらす

思出草

家

○叔又巻中をちくによりて按るに此人はよ慶安三年江戸に生れて七十八といへるとしの享保十二年丁未の筆記なるべしか、れば此翁は寛文より天和貞享年間をすかりに經て慶長前後の話をも聞たもちし人にして

家綱公、綱吉公、家宣公、家継公、吉宗公

おほん五代にありしなりけり、
天保十三年十二月十八日

浦の屋村君

藤原長房記藏

再按此書記者は下総結城の城主水野日向守殿八千石のみうち人にて高録の士なるべし

つゝりぬせびしきいとまのころ取出し見たらんは
板もむかしは今に替りし事重き軽き事共と物こと
に心を付てみるならは十にして一つも心のたすけ
共成なは日よりのつとめ思へたくらへて氣を安し
ぬべき便りとも成ぬめりと思ひ出る草々書印しぬ
此物語りわすれさらんため人のけみやうも書あり
わせりひらける事も有なれば折にふれ一草二くさ
は笑のためよみなん事有とも他見する事はそる
へし

○嚴有院様御代初又は御家督前の事にや御番衆の屋

敷わり番町の分は御番頭衆支配にて明やしきなど
有之は組々やしき不持衆之頭寄合其人の年来のつ
とめ方知行高吟味詮義の上にて鬪取に致し其方へ
被相渡たる由是はもと番町は其いにしへ一圓に御
番衆屋敷分に渡りし故也依之屋敷願有之人は然は
屋敷無御座候間何方にて見立拜領仕度と被申立迄
にて事濟候とやそれゆへ其分限より坪数多も有又
當分圍等も物入造作と存人はかつかうよりすくな
きも有と也大身にても其頃は内藤宿青山宿かりが
ひ橋山口殿ちと馬にて乗廻し是より是と見とをし

ぼん杭たて拜領有しと其頃の老人咄せしを覺へし
也番丁は双六のさいにて割たとへば六番丁のうら
は一番町と余は是に順し被割しと也よろづ今の様
子と替りし故書付置也

○台徳院様御代までは御城もき、と致た事なく今
の平川の邊御臺所にてまはら成事共候て小身之御
番衆泊り番寢道具番袋に入候而年より候女持はこ
ひ行しと也其頃之者はなし直に聞候ても今の御城
の有様見る時は中々左様とは不被思まして此已後
聞及候て誰か是を寔と思へしや

○大猷院様御代まで御成の時分御道筋今のこくとく人
留も無之八町ほり邊金六町と云所今も有之此金六
と云もの誰申付も無之にせんしよものにて所々掃
除のせはやま御成先へ欠走りせしとなり何之御か
まひとかめもあらけると也其ころせはを申ものを
は金六か様成ものと人々云しと也少々町役せはや
きにてもや有らん不知

○いにしへは増上寺表門の方今のことく本道にても
これちく道まで遠あけ小浪も来りし程之よし其頃
諸化夏の夜をとりをおどり青松寺門までもおどり

をかけ今の女子共のかけあふことく有しと也其頃
青松寺納所を勤し老^使の咄度々聞たりし也

○大猷院様法問御すき遊し青松寺其時之住持何代目
やらん甫道和尚とて隨分の學者法問僧にて有しと
也有時法問御聞可被遊間登城可致之由被仰出若き
篇參僧五十人程誘登城被致大廣間に而法問有之能
出来殊之外御機嫌にて品々拜領有之退出依之右為
祝義出家寄合酒盛致し其夜中大庫裏より致出火其
時之納所かひ敷其まゝ和尚ねまゑかけ入若々
と申は何事と被申只今大ぐりより出火仕候早く御



のき候様にと申せは和尚をひ取前にて納所
呼懸我は青龍寺へ山越に可行也御影本尊計取出し
諸道具は必手を付すやき候様に被申血脉袋をり
にかけ小僧共つれ山越に青龍寺へ被參其後小ぐり
へ火うつりとかく不消に付納所山越に青龍寺へ行
見れは臺所ては和尚へ為馳走そば切を打最中也和
尚を尋れは奥之間に小僧に暮をうたせ見物し居所
江參れは納所火は如何にと被申間とかく消不申只
今小庫裏焼候と申せは和尚手を打てかした財
寶不殘やき捨てりと被笑しと也扱於御前法問

首尾能相濟目出度とて諸大名目方其外知人之方より金銀米時服等火事見廻旁持寄夫より青松寺も米に喰續候と其時之老叟被咄し也其頃までは盆古ど参候ものへ今とかわりあんのぬきまんぢうを出せしと也今寺方そりめん出せり代にや諸事替りた事共也此和尚兼て學者にて其頃聞及名有寺々へは何宗にても行て名乗り知人に成書物之不濟義共如何と云々心底被申合しと也又折々上方へも表向は湯治に参候とひろり致し内意納所に申會所々之構談場所へは被参居殘心底之趣義論被歸しと也

○同御代上野なるかう坊とて御意に入不断御前に被相詰有時諸宗之奥儀御聞被成度間其旨書付可指上之由被仰出依之なるかう諸宗を拓被申けりは殿には御年若にて右之通り宗旨之義御尋有なし不殘申上は其宗旨あさはかに被思召久々宗門之ため悪敷間あらし書付被出可然と被申に付諸宗此義心得顔にてあらましつまみ被書上しと也なるかうは天台の奥義委く被書上候故諸宗より細やか成宗旨と御得心被遊故にや上野へ被為入と人云り

○さかひ町木挽丁も以前は今とは替り上り芝居に

ても今~~こと~~ことく繪かんばんと云物もなし五十年余

時分芝居ひいきの名かき与凡~~云書~~初それより以来

事也と云人有木挽所元長太夫しばい河原崎權之

助と云し能太夫致し其跡笠屋さんかつと云し女ま

ひつれは男にて舞けり間の狂言に今のこくとく狂言

致候一番~~代り~~代りし也近き頃四番つ、~~五番~~五番つ、

きと成也跡ほと面白残多しかけはびこりし也野郎

も前髪有りし所々町奉行渡邊大隅と申人勤~~勤~~之せつ

子細有之詮義之頃元~~つ~~つまやらうまねび~~た~~たる事な

れはとて俄に前かみはらわれ夫よりかつらかけし

とやらん云り
○同し年来にや有し淺草何方にてかびくに辻切に逢

し事有此事奉行所へ願出檢使有けれ共誠びくにて

有之は衣を著~~着~~可居處にしもなきはびくに、あらず

とて詮義之上せんまなし依之其頃しはらく之間皆

々衣にて歩行致せしか又何のほとにや白衣にたり

けり
○若かりし時分旗本衆五七千石之方は手前あやつり

御番衆もより~~ご~~ごはん人形はやりし也我知た

方などにても細工能侍寄合人形の衣類合戦人形真

方よりサヤちりめんどんすたぐひ取寄是にてこし
らひ人形廻しやうはサカひ町小内匠など云る者の
弟子になりまはし習ひけり

○木挽町長太夫座今之上るり座のごとく表に木戸な
く内に鼠木戸有し也入口左之方大屋とキヤにて安
左衛門とやらん云し此二階よりサ人敷へも行くや
うにしつらひ二かひ之角よりとなり勘弥座も見へ
けるなり其頃京極主膳正殿御舎弟伊織と申仁御番
衆にてよほと之身上と覺ぬ此人度々見物に被参同
道之人有之ともなひ行けりいつも狂言過候て見物

人不残出拂候に居残野郎の小もの共ぶたへ衣襖
持出めい／＼た、み櫃つゝら等へ入かへりぬ扱掃
除など致しもうせん花ごさ敷なりへ是にて常々出
合候野郎立役者七八人いつも取持響應酒もり有し
なり大方九半八有時はよあけ頃返りし時もあり也
時代に寄寸一座不残迷惑致事も可有也あぶなき事
共也

○大猷院様御代いつ頃にや諸大名供廻り今時とは違
ひ軽き事共絹の小もん羽織など著候て下馬に居け
れば近所よりそろ／＼そばへ人寄見物致せしと古

き人被咄し也其後風俗替りいつ頃よりかはつは鮫
がやはやり中は竹みつにてもさや計二三分或壹兩
貳兩位もさしけるとや其以後の事にや小がうり取
はやり高切米にて有しとかや云り

○若き時分餘程能振廻見及聞たりし五七千石之方々
振廻今時見聞より軽く後段などは能者そば切扱者
すりだんごゆつけなど也女中後段うんどんなど
へはかならおけいらんとて少きだんすのごとく是
へあんの入たるを一貳つ程つゝ入出せし也
○有時知たる人に被誘のほり見物に行けり三田にて

御掃除と云しは十俵壹人ふち取木綿嶋のほりをた
て置しを見て被申しは我等幼少之時分兄源兵衛は
惣領にて木綿のほり持けれ共我は不持うら山敷思
ひしを道具持紙にて板板たんちと澤山に付ゑかきく
れ候殊外嬉しく覺し也今は我子も絹のほり十俵取
もゆめのんのほりか様に萬おごりに成来れりと被申
し也

○番町邊五三百石迄之衆は皆だひ所土座にてねこねこ
と云物を敷し由又不断近所衆出合咄し一種にも有
之は銘々其主人不断之椀折敷にのせ食次の上にも重

ねふきん懸手にのせ持行しと也是は順性院様御家
老天野彦右衛門被咄しを覺へし也衣類等も其ころ
は家中方中小性は不申及不知位にても其下者猶以
定紋など、申は曾て無之有紋白餅にて著候に今は
小者中間迄定紋ぬい紋付候とて被申し也たはこた
ども其せつまでば餘り吞人多からぬやけむりを面
白ふき出しはな杯よりけふり出候人をは功者として
ほめけりよし被申し也
○櫻田御奉行之時分御歩行大勢之内裏付上下杯持候
者餘り多は無之よし夏袴など大方高宮嶋肩衣は津

寛文八年

庚子也御持頭など大嶋高宮嶋被著を覺へし也今
は様々絹類嶋絹もしろなど云物不断著用如何様お
ごりの至りとやいわん
○下々出替り元は二月二日成し申の年二月朔日二日
四日打つ、き大火有し也出替り故はたもと衆人無
之寄場々々へ被詰候事も難成依之番頭衆相談にて
願有之夫より三月十五日に成ぬ迎之事男女両度女
は八月共極らは男女一度に新参なく小身之者能事
可有也是貳之事不申及奉行所御存知は可有なれど
も外にけはり候義有之哉又大身之方さし支る事ナ

き故御吟味なきや不知

○以前者腰替りのしめ無地にて木平等無紋を人々

著用候へき今は紋不付は不被著候様に世上成来れ

り人によりさ人留上下にも切付紋など致せし也

○幼少之時分今思出し見れば其頃歩行の女中はかつ

ぎと申今之單物ゆかた深帷子之ことく又はたんの

ものやすりなど有之もよう様は是をかつき白

綸奥方乗物のわきにもしつき増禮乗物猶以付し也し

ほろしく見能様に覺ぬいつ頃より止しや不覺也

○老人被咄しはいつ頃にやむかしは大御番組頭など

は公義より急度被仰付事には無之其組々にて頭被

申渡何方之組頭被相勤候様子と被申候へは心得候

へは畏候段請取申小身か又は病人年寄などは私義

か様／＼に御座候間御免被下候様にと被申其上に

了其邊之觸方外に無之間乍大儀御つとめ候様に

而見立替り可申付候など、今の與力へ頭衆挨拶

は少品替り候まで之由古きもの申せし也今は御役

料迄被下急度いたしたる御役人之部に成し也

○大猷院様御代寺社御禮例年五月六日諸出家登城有

之御奏者如例御ふすま明寺社御禮と披露有之時末

座之出家之内より大音にて珍重ノ一万余年と法問
などのことくとなへしと也寺社奉行は不申及御老
中御側衆も是はと驚け共御前之義可致様無之上に
も何の御尋もなく如何と皆心中に不想方はなく入
御被遊候と其儘寺社奉行走出只今高聲致せし出家
は何方に有やノと聲の有りし方をあなぐり被尋
そは成者は存たれ共外より是そと可言事ならず然
に彼出家の僧にて御座候と申せは各立懸り扱々そ
こ又の事共何と申寺そ本寺何寺など、の、しりし
かられけるとかや彼叟の僧遠國之もの順當にて年

始御禮に罷出候上様之義に御座候間珍重々々
年と目出度祝し申上候重ては御祝申間敷と申退出
候よし翌年又如去年そこつ不申様にとて前方より
念を入當日弥幾度も吟味被致如例御披露有之入御
被遊去年祝候出家當年者何とて不出やと御尋有之
扱者不苦もの此時皆々安堵之思ひ有しとたり然
に其年薨去被遊自然之前表と人云しと也
○上総知行四百石被取候大御番遠山氏物語我等幼少
之時分薬師別當真福寺へ手習にかよひしに大方ち
やせんかみ脇指計にて小野郎を供に連行し也その

頃祐負之刀出来能金壹枚と申高直成事と人之云し
 を覺し也今者下作にては高直成と被申を覺ぬ今者
 ちやせんかみ脇指不相應如何成事にや
 ○廿年ほとも以前之事也一夏をひた、敷四五日間に
 夕立雷なり所々へ落し事有ぬくり合にていつも番
 日には必夕だちに逢返りぬ有る晝過よりそろ／＼
 夕立雲もよをし折々雷も遠なりしけり番所にて各
 寄合咄居けり段々光つよく雷なりけりたとはは
 瓦もねへとものかわらを一度に上より敷際りなく
 をとせしことく地ひいきしておちぬ一座是者如何

様近所へも落ぬらんと申しはらく有て人々かけ走
 音しげ／＼也其近所目付役たる部や也是にてきけ
 は御長屋へ落たりと云り如何にと委く尋ねは御成
 御殿預り役人土屋半右衛門座敷となり境出かうし
 有ほり水を子共兄弟詠め居ける上へおち懸り忽子
 共三人打ころされぬ是はと寄合両親はあきればはて
 みもたへなまきさけび様々としけれ共正氣も不付と
 也上にも御近所故早速被聞召及不便之事共と忝御
 意有りくろくにてふすふれはよみかへると云り
 左様に仕見よと被仰出後けは御納戸より拜領と

や云し扱様々ふすへ療治致しぬれども終其甲斐な
く弟貳人はむなく成ぬ惣領壹人よみかへりけり
此半右衛門と云もの初御歩行目付より組頭に成
て後御殿奉行と成けり日頃随分人柄よく人々ほめ
しもの也如何成事にやかくあへなくも子共一度に
雷にあたり死けりと皆人ふしんしけり其後申、年
大地震御長屋潰れ大勢怪我有之半右衛門長屋もつ
ふれ出候事難成夫婦并家来男女四五人枕をならへ
相はてぬ是にも最前生返りし惣領源三郎如何にし
てまぬかれ出けん一人たすかりぬ寔に思義之次第

親兄弟大勢果我壹人生たれば迎本望には有之間敷
事ながら天命限り有事無是非存命今者何方やらん
御添番々と被勤候様に聞及ぬ如何に神慮之御加護
にや運強とや可申其生付餘り丈夫にも不見仁なり
此行末百歳までも長命之程難計仕合もいかならん
とたのもしき事共也
○以前櫻田衆に山寺又左衛門とか云人御膳番之様に
覺へし歟無實子養子成を如何成故にや子細社子有
らめいつその程より實子や憂は成と披露数年被勤ける
處に其頃御家之御家老戸田勢州何方へ歟夜咄に招



有之養實まきはしき折實と被書出けるにや人不
 知はとてかく相違成事有間敷事共也可心得もの也
 ○其後御廣敷伊賀衆加藤茂兵衛と御覽覺し教年之伊
 賀有何御覽之事にて子共實養子書出せし事有加藤
 も實子と書出せり仲ヶ間より吐に是は慥に養
 子成を實子と書出したると云り何共其段無覺束事
 共以前山寺氏吐傳聞ぬ若心得違にて養子を實子と
 被書出候共有体に申直有之歟又子細も有之はひし
 と同役口を留此事無沙汰に致度事共とつふやき居
 けり然に如何して其頭被聞けるにや彼是詮義有之

けるとカん亭主内縁や有けん山寺養子之實父被取
 持馳走有しと也折亭主戸田へ被行又彼是挨拶之
 次で能者悴も御家人に罷有候末々被懸御日被下候
 様にと念項に被頼けれは戸田も何人にて候哉と被
 尋けり大勢之義成ほと御覺御座有まじ山寺何かし
 養子と被申れは扱は左様に候哉とあいさつ有長座
 之後戸田も帰宅し翌日出仕そ礼の役人被相招
 山寺何かし養子を實子の由其實父云り何とて偽被
 申上哉と各詮義之上不調法仕實子と申上候段被申
 其段早速達御耳則御改易被仰付けると也定而間違

頭替りの親類等改候節之事にや了間違ひ書けりと
也是也御追放にや又御暇にて有やしかと不覺とか
く御後くらき私は上下共にいたすまじき事共也
○櫻田にて神戸式部と云し御小姓有けり親は小十人
頭後御留守居に成たる歟と覺ぬ然に式部なりひな
き器量御意に入御出頭高知被下肩を並るものなく
兄弟一家被召出それ〱に御取立諸人は是等をうら
やみけり一とせ式部病氣之申立何方へ歟湯治之御
暇被下節品々拜領被仰付御羽織など御手自被下け
ると也如此諸事無不足有難事共なりしにいづしか

御厚恩をも忘奢のあまり折々御前の隙を伺ひ悪所
へも行しよし風聞す剩彼地にて人のりやまひもて
なしいよ〱奥ゆかしくをもわすへき心にて也有
けん羽織下など御紋付いつも著着し行とかや又は御
紋ちらしにも付下に著し器量けたかくしなし世の
悪せつには上たる御方にやとふしん致せしと云り
此事隠れあらされは公儀にて御沙汰是有折々其
場所へもしのひの人被付しと也うらやみそねむも
の、申出したる事にてもや有もしぬらんたれ共冥
加えつきたる事共と諸人云り常々人ならぬ悪心人

とまた有し也親は猶又欲ふかく内證より賄多取候
へは誰にても上を能取れしそれ〱役人に不成も
のはなまきと云り其頃音信金高次第役義直段大やう
極り候よし皆人云り彼是御罰の積りけるにや色々
品者有しか共次第を不覺終に父子三人甲州系被遣
詰籠のことくしつらへ被入置程経て三人共に病死
せしと也江戸無圓寺之ことく成甲府にもきめう院
と云寺有り此山の中段に父子三人の石塔有並ひ有
しを湯之嶋之ゆへ湯治之節みたりし也誠に人の盛
衰無常之世の中在世さかん成節者御家中にて誰肩

をならぶるものなくいきほひもりのしりたま
〱此人に便り一言にも預りしものをば外よりう
りやみ其身もいかめしきふりを致しぬ又其ものへ
便り取つし御取らしにもと諸人は是をうやまひつ
しやうけいはく誠にはつかしき事共成しにいつ之
程にか引替人住ぬ甲州山寺の住ひ夢の世の中と思
へり扱も在世之時分諸人取入賄ひおくりし金銀そ
くはく山之ことく有らめと皆人思へり一とせ上に
て暫御不快之事有御本服之節御衣類不殘御近習衆
へそれ〱に御配分被下ぬ此父子拜領之品々かき

りなき事共長持之教々毎日持はこひしと也然に父
 子御料の節甲州へ被遣候時分役人立合家財けつし
 よせし處に存之外身軀半分ほどの諸道具も無之と
 云り死去之節大小なと改見たりし人々物語如何成
 事にやそ、う成あら身拵者皆焼付之よし被申し也
 是等を思へは内證不斷にいか成費成遣方多有しに
 や又者連々御討にて常々取返し金銀衣類も雪霜の
 ごとく消うせけるにやふしんの事共也
 ○嚴有院様御代五十年程も過ぬらん朝鮮人來れり事
 有是を見物にとて知た寺方に誘れ餘多連行しや

水野軍人正小姓
 也此コト元正間記
 二見ユ

其頃は近き頃來れる様子と替りしとて、と人留
 もなくて見ると安かりき品川の邊先に知れりもの
 有とて行ぬ道にて誘る老叟知人にあひ暫く立止り
 頃て追付ぬ連の人何人ぞやと尋問はされは今の侍
 にははなし有元は如何様御歩行衆の子なりし由今
 は小花和太兵衛とて遠山殿家來彼侍若き時小身成
 方小姓にて有しと也故有てすてに切腹に極りぬ其
 頃は世も静にて旦那寺へ連行はら切せよとて乗物
 に取のせ宰領足輕中間かひしやく侍付取りこみ連
 行所は今の溜池の臺榎の木有邊いまた上水も不來

遠あきにて道はた迄水くふ〜来りしと也此處に
て小用可致よし小人云り入あひ時分の事也駕籠を
川はたにをろし表之方足輕中間取りこみ川之方戸
を明小人を出しけりしはし小用のふりにて其儘
川中へ飛入ぬ表に立居たる者とも是はとあわてと
もにとびいりぬ小人はかくご水れん上手にて飛入
としく水をくばりはしりぬ跡より三三人はいり
し者共立しまゝにてとび入れ共腰返りまては追
けれ共中々可追付やうなく川はたには付し者ども
あれよ〜とよばはりみもたへす通りのもの立重

り是は〜と手をつかね見物す川向は西内藤其外
小身のやしきより大勢立ならひ見物之様子はし
らね共小人之事ゆへこなたへ来れかし我たすけん
と言をかけ招しと也程なく暮かりけり時分内藤
殿屋敷へをよき上りぬ々様之子細にて切腹に参候
而にけ去りぬ御たすけ被下候様にと申に付被聞届
それ〜に預り人被申付かこひ置しと也付々之足
輕中間其二三間之屋敷門へ行只今々様之あや敷も
の川よりにけ上りぬ御出し被下候様にと色々わび
けれ共不参方にては猶以不知と云に在りし内藤に

て此方へは不來とて一兩日之内人あまたに不
 知様に領知岩城へ被差越用心有之圍れしか年経て
 先之主人如何なりてや有らん近年江戸廣くはいく
 わひせりと有は扱々運つよき珍敷事成と皆々申あ
 へり享保六年文照院様御代越前記與右衛門子息民部と云人御
 乳兄弟の御由緒有之御家督之後御取立上州館林五
 万石城知松平右近將監殿是也此所縁たるとよつて
 河原林兄弟此小花和も被召出過分之知行被下置太
 兵衛も御留守居迄に御取立子共御近習を相つとめ
 けり定て太兵衛は今は死去にて子共は小普請にて

有らん右舟々のかいしやく侍足輕中間共に小身の
 家成共仕置可有旨定而直に欠落もやしぬらん人に
 は様々運の強よはき有中に是等はならひなき運つ
 よ也又は如何成神慮之御惠にやと計かたき事共也
 ○八年ほと以前溜池端に居たりし時分其頃召仕之女
 とめ年季女にて鎌倉より来りし也有夕方表にて人
 音聞ゆ何事そと尋しに女の母来れりと申今何とて
 来れりや定て開帳か物参り次てに娘に逢はんとして
 来ぬへし支度なと用意致せよとて云付ぬしはら
 く有て母臺所へ来私とめかは、にて御座候與助様

御きも入にて御奉公に上り申不調法もの御懇に被
召仕難有存とくに御禮申御禮申上度心にはそん
し罷在候へ共女之義程遠く打過申候此たび用事御
座候て近所之もの連たち俄に参候間乍**次而**しかう
仕候と申に付定而かい帳物参りにて有也何用にて
出たる也と尋しかはされは私せかれ源四郎と申と
め兄にて御座候若き者にてつね／＼あそび歩かせ
きもしか／＼不仕おやちもふたん心に入不申しか
り置申候去年之春さいくのかけ取に参候よしにて
罷出それより直にお江戸へ出候て何方にも奉公致

候や終返り不申音信も無御座付無心元常々心易い
たし候存立折々江戸へあまなひに出候ものには何
とぞ心かけ源四郎を見付たまはれと大勢に頼置申
候有友たちか江戸芝札之辻と申所に朝とく見付
申候かきのてぬこひにてほりかぶり前たれを致し
通りしを見かけ申由両度までしらせ申候間扱者何
にてもあまなひ奉公成共致候や一度たつね逢返り
候様にいけん申度と念願仕候に付幸近所之心易人
キ戸へ被出候間たのみ連立参候と申さて女之
心左様にたは尤也乍去田舎にてさへ不知事は尋

かたからんましてみるごとく名どはかきりなく廣
き事あてどなくほうかふりのものは日に何百人も
通る事也札之辻と計聞及何とてたつね逢へまや
りながら心はらしに二三日もとうりう致し尋みよ
と云はさやうに可仕と申休せぬ翌朝は、はと尋れ
は今朝たつねに出候と申さて不便の心入哉頓
て可帰食のしたくいたさせよと申内返りぬ何と可
被尋様子にありやと云は今朝は少きをそく御座候て
知不申候明朝は早く先へ六過にも参候様に可仕と
申に付年寄之事給物成とも致まへり候様にと申又

翌朝母はと尋しに今朝七に罷出候と申彼是申内五
つ過かへりぬ何と逢ぬるやと云は成ほと今朝あひ
候と申に付ふしんに思ふて如何にいたしたつね逢
候やと申はされは私とおやち品川の方へほの
明之時分参候處に札之辻とやらんの先にて向より
かきの前たれほうかふりの男せいかつかう能似申
牛を引参候間大方先にて可有と思也おやち共能み
さへと申参候内行違ひ顔を横にいたし牛をおいは
しり行申に付跡より追かけ源四郎にてはなまか
とよひかけ申はいやと云はしり申候せむなく

追かけ見申はせかれにて御座候間是はと申取付候
へはさて何とて御出候やとかく是にては人通り多
人も立とまり申候間私其元へ可参候何方に御座候
やと申候間とめ奉公致候旦那様にいし赤坂溜池端
ちや屋の前と申せは成ほどわれら常之通り道存候
間後ほどたつね可参と申に付必と申参候由申扱々
不思義之事哉まへり候は、能々心底聞届ともか
くにも相談次第双方能様に致候へと申我々出ぬ返
り候て源四郎は来候哉と尋れば十日程参候てたん
かう仕候乍去奉公年之内只今は何共成不申候年明

候は、可罷帰候先々御返りおやち急も此よし御申
候様にと申あんど仕候間明日御いとま申可罷帰と
申周先々念願相と、きたつねあひ安堵致返りたら
ん仕合成事共とてよく朝用意等申付見立し世返し
ぬ寔に物は不思義之事共なり田舎より子共の有所
無心元何とそ尋逢度願にて女の道にははる江
戸へ出あてどもなくたつね出候二日めに心之儘に
行あひ在所へ返るだんきめり之事也女之心にて朝
夕佛神名何とそ一度御引合被下候様にとねん願
のり申たる故にや有らぬ物之善悪心はかわりけれ

共一念之思ひは同じ縦は悪念しつとならにて扱も
口惜き事共何とぞ此むねんの思ひを思ひしらせん
と思ふ一ねん忽鬼ともなり生りやう死靈世に多事
也可恐 / 神は不思議難有事共也誰か是を信じし
らめや /
○溜池に有し時分有時安休老朝とく入来り候ぬ何と
て早く御出にやと云はしれは少吉事有て来りたり
兼て此方組に明も有之は八左衛門相繼々養子致し
むすめにあわせ我も心易是に懸り居度と願し也然
るに今度組之内数年相勤けれども相應之役出も致

さす跡に濟候者は段々役ぬけ致せし間述懐にてと
かく代番土産をとり明渡しに可致と云もの有安左
衛門相番故相應之もの聞出し候様には被頼し由
依之新方にも浪人有之共甚右事安左衛門心付貴
様不勝手にも有之間相談申候様に申候間參候如
何存候と被申候間扱々御父子之御心入忝存候乍去
如何様に致候ても當分物入又は先方へ土産不存寄
と申候へは其段は八左衛門方より出し候積り當分
之物入もさして不入殊に安右衛門同組に候へば如
何様共致様は可有候と被申に付左様に候は、大望

不過之親類共相談にも及不申拙者合点仕上は悪事
にては無之否可申者無之一應縁者などへ咄迄何分
にも頼入候と申其後たも無之定て聞合又は如何
成了簡も有之哉と存居よほと間も有之我等見廻に
参り先日遠方御出御心入忝て如何と尋候へは
れは此方より其段申度存候へ共遠方彼是打過ぬ
最前代番望之仁右之存寄に候處に頭之心底直り役
人系も可被出之由依之其身思案替り番代望無之と
之事候残念成事と被申候間其段はとかく縁次第之
事不及是非又重而と申畢其後又同組に番代望仁有

之此時は此方急はた無之新兵衛に被居候今之八
左養子八右九郎取組成就いたしぬ最前之心入にては
安右も此度又様之明有同人才覺候へは一應は
心廿ん其元へ存候へは共不縁にて調不申又と申も
新兵衛被存處も有之此方取組各早速相濟候左様に
心得候様にと可被申事之様に存候にた無之は為
聞候も如何と被存候て為知無之や全りみ不足可
申事にも無之縁次第之事に如何成所存や不被
知申は養子致人も最前之人取持人も同人同組之事
に有之は如何様あちわは為知も有度物と思也是

等は能心得人々取持致ましき物にあらず一言之わ
けにてたり不足有事也為心得書付ぬ

○すへて人は眞實有度物也是ほう友の實也たとへは

山海隔りたり共心は近くありまほしその人久敷音

信なく了暮しぬ如何に有らんと心に不絶思は人の

常可成一度かれに力をあわせしとてかのものうへ

に及はし又すくはつして指をかさらめや一たひの

力を忍と思ひ重て返りみきるはほう友のましわり

とはいわれし勢たに有なは幾度のかきりは有まし

き事也

○有時鈴木藤へ参りしに父子しはらく咄兼てりわ

申つる也能養子望之方有之子息甚右相談不被致

やと被申何人に候哉不存定てはやり物土産入可申

及なま事と云はすはなし先之仁望御目見以上の子

七すめとあわせ年相應に有之は土産望無之よし幸

其元近所之事弥太へ聞合候へかしと被申間心得よ

し申返りぬ道すかり思ふに年頃恰合望に候は、先

より近所也可被申にすたなきは不相應か又は兼て

被知候へは生付望なき物と思ひ有夕方みまひ咄之

次て御同名義左殿養子望候よし申方有之弥入

少心當有之様子承先方へ咄見可申と申候は弥太被申
は成程義左衛門養子望申候御目見已上之子にて其
身實躰生付年頃二十之少前後望申候當分支度土産
之望無之相調候て五三年之内督禮為致其節隱居部
也八疊敷よし建給様には計之望外入用も無之と
被申に付則龜田氏へ参咄して御存知之加藤義左養
子望之由我等忤相談申様にと申方候へは拙者杯は
御存知之通り及ち事依之清三殿御相談被成間敷
哉と申は御心入忝存候乍去是は少々心入有之望な
きよし左之新兵衛殿御二男は如何と申は是も少々

心當候間望有之間敷挨拶也今時御目見以上へ當分
少も物入なく幸成事をしし義と申せば龜田氏彼是
と可有より御二男を御相談候へかしと也然共當分
何程不入候共夏冬衣類其外少もしたくなく候へは
隨分輕しても十廿は入申事候其段存も不寄と申候
へは如何様共可成事致相談義と被仰重了弥太へ
も心當之方聞合候へは心當有之望無之由追て有之
は御知せ可申と申は頼入候由被申其元御二男はと
尋も無之此方もたたく過りぬ此折ふし蒞部縁
者人は是者福者にて我も文次口入にて借金有し也

圖書刊行會

是者大番與力番代被取組成就せし故兼て用立候金
子取上ヶ被申よしにて無是非あなたかなた漸々か
り替返濟いたしぬ後きけは如何様當座三百兩程出
金ゆづり渡候諸事支度共には六百余も被出候よし
金も人により澤山有之物也人には様々輕重有物也
當分の物入なく支度十二に手支殊に御目見以上
之養子に一生之片付成得ぬもの有り又其身少々支
度は親類したて被出土産は我構なく大分の金子養
父に出させ居張し仕合又組付與力へ六百兩余なけ
出し有付し方も有寔貪福其身
果報也更うらや

○我幼少之時分明曆三酉年正月隠れなき大火事江戸
中野原之ことく御城も大分焼失人も所々にて前代
未聞夥敷やけ死凡十万八千余とむさしあふみと云
るさうしにしるせり日本初り所々の軍異國本朝終
にか程之大死無之よし我も八つ之時なりし今の溜
池端松平丹後守殿屋敷以前は水野日向守殿屋敷也
是へ上屋しきよりにげ行此内長屋に家中之妻子大
勢入心居たりしと也此時銘々おや
自分はとに
もかくにも成行なんせめて幼少の子共にうへさる

様にとてさま〜食物之才覺致せしと也去共江戸
中うりかひ何にても一圓にあらされは金銀之力に
も届かたく女房子共つどひ居てたき居たりとたり
然所にやう〜二日めの晝過小き器物に食少求来
我とあねとに給りしと也余の親々も如斯可成定て
母たろ方へはと〜くましきと也其翌日の頃より人
別男女人数食計焼出し給しと也然所に二三日過我
疱瘡わつらひ付ぬ御息女未ほり〜り不被成故家中
指置事難成町屋を求め共近邊に無之やう〜芝札
之近近所牛町に以前兄被使し小者之親少々あきな

ひ致し夫婦居けり此もとへ親被参此よし被申はや
先達て外より人来り其家しきり致せし所へ被参し
故しか〜と被頼けれは家主是は私古主に御座
候か様之子細格別之義御聞届可被下とわひしと也
先成仁も侍にて被聞分扱々無是非事共とて帰りし
と也扱此處に七十五日住居後やしきへ返り其節
きめに逢候事共母折々被咄しをかすかに覺ぬ時節
到末幼少より親へもくろうかけしと心に悔ぬ
頭書此書すゑの葉に我廿計の時老人に聞るに
酉年の大火事のことを書くはしく書たる記にはや

け死し人一万二千余人とありそれを寫してむす
しあふみと云草紙は出来たるよしそのときに一
万へ一を引て十万としたる也と見えたり此一葉
ゆふれそこねよごれてやうやくによむことを得
てこゝに寫しとむなほ淺草並木の櫻のことあ
れと全文よみときかたしをしむべし
○此火事之節親居給長屋今思みれば相馬殿屋敷之か
た中程と覺ぬ色々書物有し内横半切節用集有しと
也土藏共へも火入地は二三尺もやけ入赤土に成し
所によく日やけ跡へ親共ちひ行しと也やけしかな

物し替刀等赤く曲れるをかわら下より取出しを
覺ぬ此處書物有し所とてかなたかかわり取の
けさ世給へは瓦之下にせつ用本四方端々少つや
け紙数廿計残しと也さても不思議大地迄やけ入し
處に如何なれば此さうし少残けるや若文字文句に
も替れたる事もや有と懷中有て後見給は替事無之よ
し是を聞人火防にも可成とて一枚貳枚つゝ所望被
致未少残有之寔火防にもやちるらん我覺て三度ま
て張直し土藏不焼三田元御屋敷土藏は甲州引越之
節金田半左衛門に譲り不焼土藏皆々戸内に張直し也

土器所榎坂甲府より出しせつ是にも小き土蔵たて
置赤坂屋敷へ引越之節所望により人にゆつりぬ是
も三年前以前大火此所も焼たりしに土蔵不焼よし都
合五ヶ所へ土蔵火難のかれぬ時節にては可有なれ
とも幸の事共とよろこひ覺ぬ
○我竹馬之友咄けり此姉智渡邊源右衛門とて土屋相
模守殿に大目付役にて有し御老中前之事にや有時
家老共右大目付被呼出家中之者上下すり切致難義
之由聞及ぬかち以上之侍銘々借金有次第致詮義分
限不相應多少によりす可書出旨被仰付依之組有も

のは其頭々不殘呼出し仰之旨申渡し借金買懸り等
神文にてたとへは分限より多とて減了事なく少分
なり共其儘書付大目付まで可相渡旨家老申渡銘々
心にも皆々書面之通り拜借も有之間敷不相應に多
と存ものは少し内に書出しけるも有とかや輕きは
少書加たさや不知然に五三日過候て又家老目付被
呼出此間之書付吟味之上神文にて書出し相違有之
間敷と思也銘々大分大借是にては家中不成段尤
なり依之書付之通り多少不殘はい借申付間返納之
後は取續候様に皆々致相談能程に取計候様に被申

渡家老目付は是者大分之儀如何に御すくひにても
餘り結構な事として互に申合ぬれとも無聞^入右之
段申渡叔々難有事言語に不被申上旨一同に申は家
老目付惣名代罷出御意之旨申渡皆々難有奉存旨一
禮申退出す依之数年之困窮夢の覺たる心地みな
借金なく妻子一家のものす、めき悦あへる事際り
なしかくて五三日過また家老目付被呼出けり是者
如何様此度之書付相違之儀も有にや又者分限に過
候大借とがめにてもや有ぬかと家中少は氣を詰し
と也然るに存之外先度之書面は相違有間敷とつく

思に只今までの右借金銘々可相濟也今より暮
迄又銘々相應に借金かい懸り可致と思也我も大儀
に乍思ひ家中すくふ處に其甲斐もなく少不足の様
に思也依之百石に付^{拾兩にて有や}追拜借申付間隨
分取續候様に可申渡旨仰有者家老目付も是は不存
寄最前被仰出候さへ結構過御請申上兼候所に間も
なく又御意之趣何共御請難申上奉存候さいせんの
儘にて先々被差置候様に奉存旨達て申けれ共いや
／＼常々我費なき様にと心を付つましき様に家中
にても可思みな／＼困窮之節可救ため也然上者存

分に通云付間已来身上取直し妻子心易養候様此
旨可申渡と仰有は奉畏と申又々家中呼出し御意之
趣とて申渡者何もあ計云て誰一言も不得申互に
顔を見やりか人侍ひを流せし者も有とか也是は誠
に天下無類不思義之救様珍敷事共也依之
家中の侍申合是ほと御厚恩可有事共不被存
下尤金銀心儘に可遣事もつたひなし 之後は
其通向後金壹両共入用之咄に申出し多分一座之
評次第可遣不入事と了簡候は、可相止と互に申
合大切に遣しとか也其後相州公にも尾州へ上使

又田中城請取増上寺大庫火藏御普請之御手傳事
度々物入後者不勝手に被成よし
○御同人いつ頃にてや有し増上寺大いり計焼し事有
此ふしん御手傳被仰付家中惣奉行右大目付相勤け
り無程出来いたし相摸守殿にも御満足源左衛門被
呼出家中にて此度御手傳首尾能相濟上下無異存
定て御褒美御加恩も可有と皆々察せしと也然るに
今度御代初て之御手傳首尾能仕廻日用人足家中共
に大勢出入怪我等も無之其方はたらし骨折大儀と
被仰在所之雉子二給りしと也か程常者つましま事

共成に無類の大救ひ諸人目を付替りしと也是等上
代の風成や不知

○

幼少之時分姉などひな遊び有しをつく／＼思出し
みれば我娘たて玉し 大に違ひ軽き事共也金銀之
紙にてこしらへ今も在郷などにはたてぬる紙ひな
少ての能物也是をぬり長持ふたをあさのけ此内へ
立たりへ今時のそくたいひな人により二三對持し
さは何方にはだいらひななんついで有とて見廻りし
也大身もそれ／＼に軽き事共水野日向守殿御息女
ひな道具あねなどに給り持しはさみ箱近き頃迄有

し也ちいさきそ、う成鉄箱しんちう金物棒通し計
ふん梨地けんかたはみ紋付内はあい紙にてはり今
者本ぬりの八さう金物諸事順之結構成事共奢の至
極可成也

○

所々にて盗も様々有なれ共さりとは不思議と思故
書印ぬいつにてや有けん増上寺本堂之上むな瓦の
押金物ぬすみし事有凡壹本之重目何貫め有や五人
十人などにて平地にても自由にはふり廻し難成か
るべしましてかうばい早きかわらやね高き事如何
成てうまんにて取ぬるや諸人ふしんしけり御詮儀

有しか共不知様に覺ぬかくれなき事めいよの事と
思故書印ぬ

○同所何之御玉屋にてや有らんにしきの御戸てう盜
しとや常に役者一人つ、泊り有りあさく代りに
は互に所々改りけ取渡し有ことも也請取時分改おと
しける歎後見出しけると也物は念を可入事共也不

断の事は何方にても怠る事有故にや

○女にも生付きどくなるもの有親存生之時分せたが

や赤づ、みと云る在郷より年季もの置給ひ器量も
不調法誠の在郷なりされ共きれいをすきあさく

いつとても六をき致し水にててうづ遣ひかみゆひ
ちやに懸りむつ過には母をき様にちやをしんしけ
り其ころふだん我御番には六過にいで御供などに
は七半に出ぬいつとてもなつ冬髪取上すして食物
ちやに懸る事なし近所壹人身の相番衆まねきせん
しちやふるまひて連たちけりその頃雲雀をかひ置
し女也年明在郷へ引込家持し也手作有し物とてあ
わひへちど其ほどをへおくりし也夫は傳三
郎とてりちき成百姓たりいつも持来り又者歳暮と
ては大根里いなど持来り幾年も不相替来り一年

火事に逢し事有近き故火も見えければ江戸は大
火事定て我等も焼ぬべしと察し翌日杭木竹かわ等
馬に付来りぬ皆々怪我なくのましや心もとなきよ
し申ぬ其頃下谷に親仁様の姪吉田喜左衛門母いけ
れ共江戸の内にてさへ年寄如何と早速はとはざり
しに三四りのがいかうよりたづね来れは心ざし
まどく可成大火にて木竹も求かたく定て此節切出
ぬらんしからはよむ相調へし付来れかしと云
は馬もち不申間成次第と申返りぬ又一兩日中一二
駄付来りぬ代如何程可遣と云は馬はかりむまにて

御座候竹は屋敷圍のたけ所々きり申候代に不及と
申夫にては中々留をくまし彼是とてしはし申あひ
しかわきより取あつかひ漸々よそ成半分のあたひ
遣しぬ是にてさへめいわくかり返りし也其後母は
て給ひ如何聞ぬらん五日之内女房来りぬ数年の
御なしみとて落るひしけり一兩日彼是親人のとき
して返りぬ母不断下著せられし古き少やふれし小
そで有あかつき見ぐるしわれともなじみの事かた
みとおもひとしにあやかかり子共に成ともまかせよ
かしとて遣は是又大にじたひし是ちん可被下とそ

んじもらひ申には不
出たりとはとてかぢし
みぬ
されども久しきな
しみ親も心さしの玉
ふ間せひ
持行候へとて遣しめ
近き頃まで傳太郎存
命之内は
折々来りしか夫はて
おとづれなし女にて
も眞實
といきたるものも有
そかし思へき事也
○親
いませし時人に對し
物語りの縦事に牛を
かひぬ
る者其力をし縦へ
は十人力有牛名は八
九人力の
荷を負せ遣ひ八九人
力へは又順之そのち
から内々
に荷を持せつかふ時
者牛もちからつりて
末永く
使れぬ又十人力之牛
へ十一十二人りき重
荷をふせ

て遣ふ時は日々に
つかれ力をとろへう
し早くそん
づる物と云りと折々
御咄し有しを如何成
事にや此
たとへ度々有ぬる
と思ひ過しつる今我
年老何かと
幼年よりの事のみつ
れの折から思出しあ
ちわ
ひみれは誠に此心
なりと心にてつし思
ひ合するの
み後々よくくふう可
致之事也
○同
常々仰らしは立のほ
りし人はさまて夫に
はよ
るへからす小身成も
のは日々あふとくを
きちびん
いわざれはひとり働
不成もの也同しくは
自ざりち
ひん致付れば旅の空
ぢにて一入能物也つ
ねも火

事々との時分てうほう成物と仰られしを覺ぬ

○同若きもの者行能方へ不断出入少も隔心に思ふ所

へは遠さかるもの也老若共に人は常住の心使ひあ

らましき物也行能所へはひかえ隔心成方名はつと

めと思ひ行ぬれは自然と互の氣通し合同し心に成

物也と御咄し有し也能あちわひ可思事也

○人の生れ付にて永せつちん自然とならば、成べ

し時節到来心外の儀も可有不断心にたへせつ思ひ

心にかけなばいつとなく常成へき物そかし

○下郎のせわに早みちはや喰早せつちんと云り

○すべて物は早ふて悪し大事なしおそふて悪し猶わ

るしと云り

○山内右近殿御舎弟大膳殿未養子に不被成已前部屋

住之節有方にての玉へしは歩行の侍新参もの朝夕

能経などよみ後世願ひしを歩行傍輩心易なりお手

前朝夕能経よみしゆせう成経も達者能物覺合点不

参坊主返りにてはなまかたとわむれ問はわけもな

き事とてあいさつ致し其後ほうばいせり問は後

は互に心易なりて申様何をかかくさん成ほと以前

は出家に成たり今の心故不断俗氣にてしのびて看

喰けり氣も詰り又直段も高直にてあたり金銀費やし
し所詮此心不止者連もろく成出家にも成得まし還
俗せんと思ひいつとなくげんそくせし也人なみ
にせいも高く能奉公には難成てかち奉公にちり
り扱今思ひみれはむかしは心當なくふめに錢かね
人くれしあひた大儀に不申し能者共寄合喰けり
げんそくせしかば猶々氣も不詰能者可喰と思ひし
に格別違ひ如何なり出家之時之ようなる者は不
思も寄不被喰而たま今喰着はいわしつれなり
ては不被喰中々元の出家戀しとて大笑せしと也寔

みぬ事ながら何方にても云り是は大膳殿少おどけ
たる御人にて咄しを直に聞たり出家返りの心俗の
うへにも常に有れぬらんたしなむへき事也
○大の庚申堂之わき道より目黒へ出る道有此邊に松
平若狭守殿下屋敷有何方にて過番晝夜時廻り致
せしに有朝六つ廻りの者町境にて道之みそはたに
大さ成やつこのめり死居たるを見付警町の過番
呼出し此通りとて立合五人組其外其近所之の大
勢立合何方之もの成や不相知先引出し懐中其外改
見よとて引出しわきさし頭巾なと取は坊主なり是

はと云て皆立寄みれは作りひけたり扱者出家可成
やつこに似せ品川ちや屋へ行さかなくらひ食傷に
て死ぬらんとして乍笑懐中をさかしみれははなかみ
袋に銀少手紙有寄合披見すれは旦那と見えて来り
何日たれ心さし御座候間ちや湯頼入よしの手紙寺
先之名も有之是者何方可成と詮義すれは二本榎者
大寺の寺中よし知れるもの有さりとて此儘しら
せ死骸引取せんも餘り成事とて寄合し者共だんか
うにて作りひげぬり墨も洗おとしわきさしも取隠
し其元御住寺食傷にても被致頓死候也道はたにた

をれ死夜廻りの辻番見出し皆々立合懐中改見れは
御寺之名之手紙有之間注進申候其元御住寺に無紛
者死骸御引とり可被成候さなくは主不知よし公儀
へ訴出候段断申遣は寺にておとろき忝とて引取候
よし水野殿之家来原彦太實父此邊に住居せし故具
に聞ぬ如何にいやしき出家今おもてを見る物なけ
れはとて悪名を返せに残おき法類のつらさをよこせ
し事あさましき事共ふびんの事共也
○谷中の去大寺門前に年頃之夫婦とうふや有ある時
夕方御住寺一人被参か、
と被申に付か、もお

どろま和尚様御出遊と云へはおやぢも共に立向是
は何とて御出遊候哉と申せは住寺被申けるは我
姪去はたもとの妻成かわかきもの連ふうふいさか
ひ家出をして来たり姪之事不便ながら出家の若き
女を可置所方し二三日之内にはわび事いたし返
すか又は親類方へ可遣二三日是にて養くれよ外聞
も悪若き女はつかしく可思と内之ものにも不知候
間必すたすまし則連来れりとして被渡ぬ夫婦畏り安
き御用か若き時は何方にてもか様事有之物也くる
しからす追付御きけん直り候は、御迎可被遣候御

あんし被遊間敷候私共御預り申候へは随分大切に
御馳走仕となりへもさた仕間敷候被思召間
敷と云は兩人頼とて被帰けりうけ被出て来とて如
何成便りになし有方へ内つうや有ぬらん翌はん
夜に入戸を音づる夫婦是者和尚様御出ぬらんと立
さはき戸を明けは御侍てうちんにて御出有其方は
てい主成か是へ我妻来りぬおせうの姪成か少のは
ら立有来りぬ日敷も過れば人もしり外聞悪敷間ひ
そかに我むかひに来りぬ連行へし其よし申せと云
は夫婦よろこびさて、早速御機嫌直り御眞實御

寛文八年ナル
ハシ
申ノ年火事

可申上と申候へは夜中之事明朝申上候様にと被仰
候と語れはおせう是はとあきれたる躰にてよろこ
ぶ事とてにかわらひ青くなり赤くなり物くるひ
のことも其はかかれしと也此事後に皆人知たるとよし
寔あへな事共能きみとや可云笑止とやいわん迎
大わらひ
○越前大工は常々大工と少異成事有道元和尚の披官
筋とちのり大工小工とて次第有し也いせん青松寺
の類焼之時分越前大工大勢来りて寺たてぬ棟あけ
之時素袍を著し取行し也細工道具も箱には不入糸

自身御迎に御出遊し和尚様も御満足可被成候御知
せ可申哉と云はいや
夜中と云定て内のものに
も可被隠間明日我迎に来り連行たりと可云れは追
て可申悦とて被帰れは扱々を目出度御事迎見送り
よろこひ翌朝門の明を待かね早々参れは住寺はか
んきんして被居しかおやち早朝に行しを無心元經
よみさし何と
氣色にてもあしきやと被問はい
やお目出度事御座りますと申に付弥ふしんせら
れ何事ぞと被申はか様
の事にて殿様御迎に御
出遊し御まけんよく御同道被成御返り遊候御知せ

たてにてかますのやうにこしらへ是へ入けり其大
工咄せしか籠屋などこしらへ申には秘事は何方や
らんかうしの所一こまそをみちかく致しおくよ
し云しを覺へし也大事の田人などには可心付事也
○今のからす森いなりは我幼少の時分元屋敷主は不
知大ま成明屋しまにて宮も今の所に少まほこら有立
て有ぬ其頃其近所やしきに兄被居し間我幼少之時
折々行とうりりの節は遊ひに行し也近所之子共寄
合宮の近所へ参れはばち當るとて寄付ものなし其
後の事にやいなりに折々参りも有又往来も有之に

より年寄しあめうりいつみ程にや毎日宮のもとに
居あめをうりける間かつうはまとうのためと存け
る歟あけのふりやのめくりはま、申め年久しく居
けると也その頃何之寺社奉行衆やらん家中に親類
有軽き浪人神主田舎より来れるかかの親類へ便り
やしなわれ何方にても小屋しろ成共見付宮寺に成
共成度よししんるひに令談合折々爰かしこ見廻り
此いなりを見出しあめうりに近付子細を問はいな
り小宮宮もりもなし我不断此處に飽うり居守り申
故そうちなど致し御ちそり申と云りかくて神主親

類に相談いたし候宮守に成度旨申に付急度したる
事にてもなく役人を咄せし所に急度致せし事にも
なくあめりり同前宮を守り居たらんは何方よりと
かめも有間敷と云は扱はと思ひなりへ道具持は
こひしつらいければあめりり大にはらをたて我は
数年此所に居付あめりり居也其方何方よりと来
り宮守のことく可成とは思ひも不依と云へは神主
は其方何方より御ゆるしを請我儘申にやとかくを
かせし可居とすでに申つたり幸寺社奉行屋敷へ
行訴ける也主人仰にや又は家老下知にやあめり

り申所一利有され共急度致したる事にてもなく
互にあきなひ同前の事兩人ともはその宮地にて
うし等致しあめりり守り居よとあれは畏り候と
了神主は元その職つとめしものなれはまつりのも
のへは御へいななどいた、かせいんなどむすひよう
たひらしく次第に様子よく人も用れは後はあめり
りも何方よりか古き襷束など求め出し其品見なら
ひまねび西神主となりしと也定て今も其子孫にて
有ぬるや不知かりそめのをこり故有事をしらせん
ため書付るちり可心得義也

○世に風は二八月と云ちらはし就中秋は二百十日を

相守り此時節過ぬれば心易しと皆人云りむかしは

十月有ぬる也五六十年以来は二月の風は不覺也秋

も二百十日以後大風吹ぬ一とせ八月廿三日大風に

て大坂表者つちみにて所々の道橋不殘落富田の了

けいとわかや云る唐僧も水におほれ御舟手高林殿も

水におぼれ其外支配輕きもの町中にても牛馬人共

にあまた死せしと也京都二條御城所々御矢藏のの

き瓦吹をとししやちほこなど吹曲し也其後覺しは

八月八日同十五日九月十四日人しれ大風二百十

日以後也可得心也

○嚴有院様御代一とせ飢饉之事有柳原土手下非人こ

や懸り竹やらひ俄乞食あつまり居けり也其後此時

よりうりかひ米直段高なりぬれ共非人不出作の

出来者大様同し事たへし非人なきは人功者に成

たる故にや又如何成わけにや有らん

○老人被申しはむかしは芝元札の近所海はたの方

切支丹寺とて有とかや其頃には宗旨のものもころぶ

とて本尊をまたげは御免有しとかや時代くにて

ゆるかせ成事今は思ひもよらす

○御弓町に稲垣名字貳千石余之はたもと有奥局と云
し物之子幼少の時分より小坊主にて奥おもてにて
被遣けりいつ之頃にも稲垣殿若代になり坊主も成
人致し表へ出被遣けり元来生付悪積悪の事有己に
可被切に極りぬ母なけまかなしみお袋様へ取付様
々となけまさせひ此事不叶は私共に命御取被下候様
に悴被切いのち生てせんなしとてかまくとまなげ
くにより御袋にもけする幼少よりみたまひ母しき
りになげくも断としのひがたく此よし御子息へ御
わひ有されどもか様／＼の事とて承引なかりけれ

共利を曲て是非共御たすけ有度よしさま／＼被仰
によりもたしかたくせめての事とて坊主になし被
追出しと也夫より先々にて小ぬすみ致しよ渡りい
ちがき殿屋敷あん内能しりければ有夜をくの納戸
へ忍ひ入物音しけり御袋めさめふしんに思ひ次に
いねたる女を呼ちん戸さはかし火持来れとてをき
給ふ女も其まゝ火と存して持来れる所をちんどもよ
り出さまに切はあつと云てたほれ死火は消ぬ御袋
是はと被仰所を一太刀切しか共うす手にてこいよ
／＼とよばはり給ふによりみな／＼欠出表へもし

らせしかは侍共も走出爰かしこ尋見れ共さら不
見となりは同心組屋しき之方堀に人の上りたるて
い足跡見へければ人を廻し断有りとなり近所にて
も夜中大勢とよめきてうちん餘多見ゆれば盗人可
成と手前用心火と存しけるにより堀越に聲をかけ
盗人其元へは不参やへのり跡みへしと申せは
心得たるとて見れば堀きわに火事用心とて二三疊
敷に穴ふかくほり置しへ堀よりとび下りけると
落入片角に伏居たるを見付是に見へ候とて案内致
し梯方どにて人餘多行とらへしはり終に被切母も

被追出しと也最前可被切をしいてたすけ給ふによ
り其身は元より死罪可成に御袋にも可てを負せ女も
被切殺母も年老るろう致させ重たひせひ力き事共
也
○其後之事にや櫻田濱の御歩行組頭櫻井と云者此子
生付悪何やらん子細は不覺養ひ難き事にて追出し
ぬ母も心根慥ならず一筋に子を不便と思計にて父
の留守にはしのひ束れはかくし養ひ後々は座敷板
敷之下へ隠し置しと也子共之節より長屋續妻子有
なしは能しれり妻なきすすの家へは晝も忍ん下は

い歩き食物等さかし求め喰し也壹人身の家来供使
 より返り見れは有し食物不見如何成事と思ぬれと
 も左様可成とは思も不依たびふしんに思ひけ
 る處に如何成事に也やあらわれて家之えん板はな
 しせんさく終さかし出不被隱置わけにて下谷御屋
 敷にて被切けり親も御いとま被下らうせしか
 幾末如何成行ぬらん母のちひあたと成其身も被切
 親も浪々の身苦勞し死ぬらん不知
 ○をやいます時朝夕食之時分人來れは一いろもなけ
 れと可進と云り先成人末のそみなし給わると

云れは先に約束ありやたかくは参り候へかし奉
 公人は大小共に何にて向處にて食する物也とて
 有し也
 ○老たさるも若きも不断氣みしか成は人氣遣その上よ
 ろしからさる訛詳云物也可心得第一也其身も大き
 成損多し外より云は見かけより短慮なり器量と云
 をしき事哉心をたやかぢらましかは如何成御奉公
 御役も可成にをしき事也とて云物也心得嗜へき第
 一也

○享保十巳之年淺草御藏小揚之者に理兵衛とて六十
余之者有此者りちき成生付其身給分は並に金三兩
一人半ふち如何成故にや古主之母可行方なくてや
有けん廿六々年以來引請養育しけり常々實躰成致
方天の御惠にや御藏奉行支配之諸人目に付物にて
被聞合けり處に同輩之面々一同に勝れてきどく者
之よし申に付上御仁心深き思召兼て勝れて忠厚
者有之は可申上旨其支配へ御觸有し故右之趣
被訴候處に弥無紛實躰者と申に付段々上へも相達
忝も入御耳為御褒美其身一代給金之外米三石宛可

被下旨被仰出其上淺草御門外松平千次郎と云し人
之上屋敷之持地表口四十二間裏行廿間余之處被下
置年中地代等宿ちん十二両も可有之旨にて助力に
も可成寔冥加之者成と諸人うらやみ申あへり
翌午の暮水野和泉守殿右理兵衛に被下候屋敷輕き
者家建候事も難成古主之母養候助にも成かたく可
有之旨相應に普請致被下可然と支配之奉行へ被仰
渡猶以不思義之仕合物天道之御惠と諸人申大積り
屋作書付奉行被差出候處に折節同所猿屋町と云處
に貞岩院と云者之上屋敷有屋作有處當未正月右半

手本
二行

これよりつゞきすゑの一葉やれそこねよびれて全
 文よみ得がたし明暦火事の事は上に写しつ淺竹並
 木の櫻の事あれども全くはよみ得がたしその大意
 は並木の櫻は酉の年大火より四五年の後観音堂の
 うしろへうつし植たすおもむきを記せる也なほ此
 事にも珍奇のこと、もあらんをやれ失て傳はら
 ざるは遺憾といふべし

○
 按るに此記類本を未見おそらくは此記者の自筆に
 やあらんかしからは世に傳ふところ此一本に限れ
 り百余年の俵へ珍らかなるに慶長此方の珍説を

分四間半之處引替可被下旨被^仰渡刺去年之宿代半
 分今度被下旨大岡越前守江被^仰渡則理兵衛召出右
 之趣難有可奉存旨被下^候處重疊難有奉存旨御請
 申候右之金子は只今迄大分終所持仕候事令指置可
 申處^候旨相願御藏へ御願申上候由前代未聞之事
 共末之世と云共天道^加はときはかまわに御
 惠有事万民尊可奉思事共也

未正月十八日和泉守殿被仰渡旨承候畢

二行

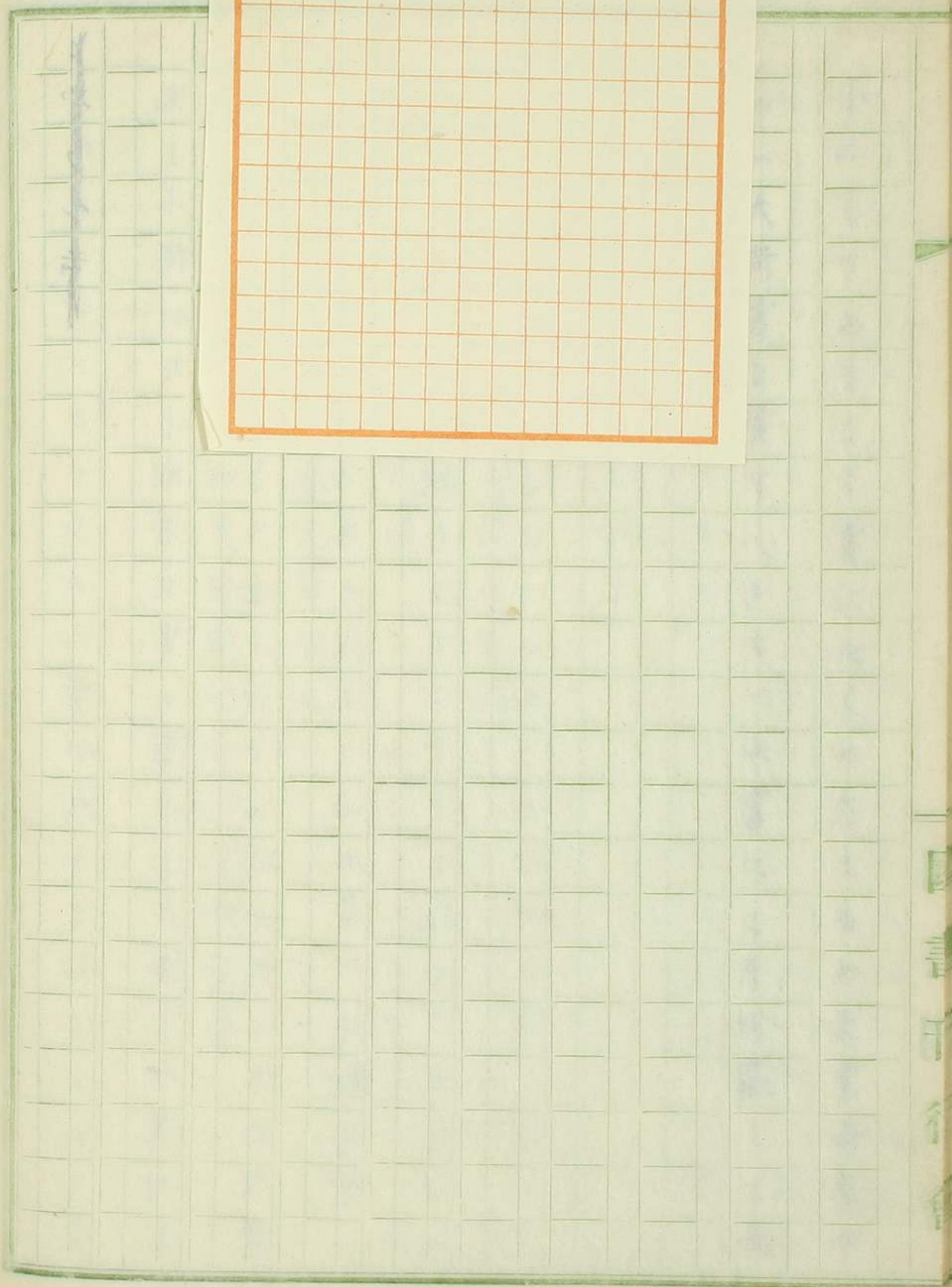
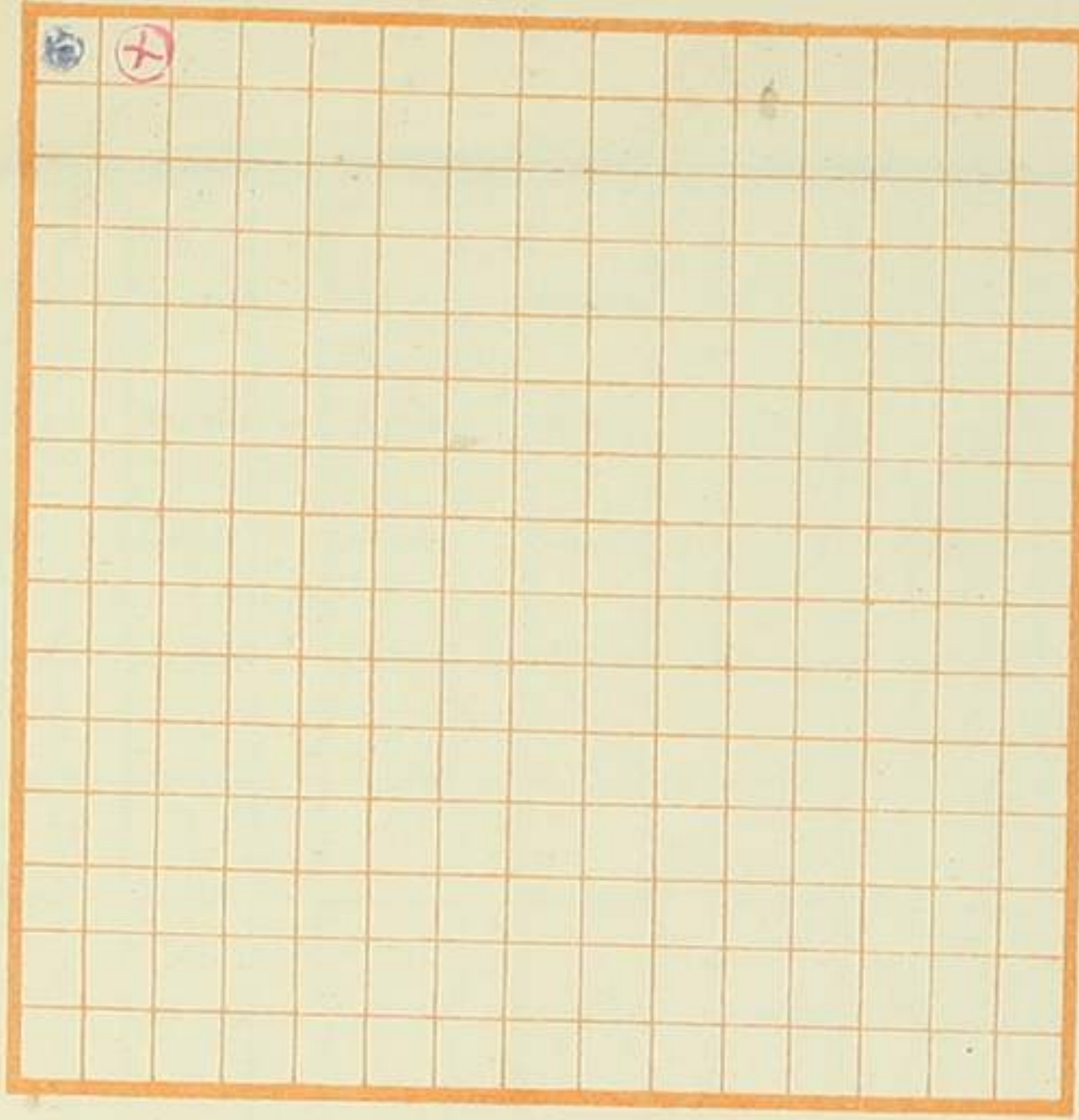
五

今にしてみることに實に此人のたまたもの古書奇書中
の一大奇書と賞すべきもの此書にこそ珍藏して長
く傳へまほし

此書は... 大奇書と賞すべきもの... 珍藏して長く傳へまほし

とわらへん去り

4年7月



行會

